

『源氏物語』 柏木巻における「事の心」を読み解く

岸 ひとみ

【要旨】『源氏物語』柏木巻において、光源氏が不義の子を抱いて、『白氏文集』「自嘲」の一節を口ずさむ。それに続く心内文が、「この事の心知れる人、女房の中にもあらむかし」である。

「事の心」は、真相・事情という意味で、従来から薫の出生の事情、柏木と女三の宮の密通を指すものとして、「事の心知る」は「心知る」と同じように解されてきた。本稿では「事の心」に着目することでさらに内包された意味があるのかを考察した。

その結果、「事の心」は深層を掘り起こしうる語句として、表層の意味に対峙する隠された意味を有するものであり、二つの意味は、「事の心」に続く動詞を媒介として相対していることが判明した。

この部分は源氏の心内文であるため、表層と深層は、源氏の見せかけた表面上の意識と内に封印した意識となり、深層にあ

る「事の心」とは、女房が知らない真相であることから、源氏が薫の出生の真相を知っていることであると結論に至った。

源氏が真相を知っていることをわかっているのは女三の宮だけであるので、源氏は「事の心知れる人」として、心の奥底で女三の宮を意識し、自分の咎だけでなく女三の宮の咎にも思いが及び、「二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ」に繋がった。表面では女房に意識が移ったように見えるが、実は朗詠前から、女三の宮に対する意識が中断されることなく続いていることが明らかとなった。

「事の心」という二重的表現を持つ語句により、源氏は女三の宮の密通事件を封印し、意識は二重構造となることが示された。

【キーワード】源氏物語、事の心、事の心知る、深層

はじめに

柏木巻において、五十日の祝いを迎え、源氏が初めて不義の子、薫を抱き、『白氏文集』「自嘲」の一節を口ずさむ。続いて源氏の心内文が次のように記されている。

この事の心知れる人、女房の中にもあらむかし、知らぬこそねたけれ、をこなりと見るらん、と安からず思せど、わが御咎あることはあへなむ、二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ、など思して、色にも出だしたまはずいと何心なう物語して笑ひたまへる、まみ口つきのうつくしきも、心知らざらむ人はいかがあらむ、なほ、いとよく似通ひたりけり、と見たまふに、

〔新編日本古典文学全集〕 柏木巻324頁

源氏の一連の心内文の中で、「事の心知れる」に続いて、「心知らざらむ」という語が登場する。⁽¹⁾ 肯定と否定の違いはあるが、共に、「事情・真相を知っている」と訳されており、柏木と女三の宮の密通、不義の子の出生を指す。字義的には、「事の心知れる」が「心知れる」となっても、意味はあまり変わらない。これに関して先行研究を確認すると、関根賢司氏は、「事の

心」について「全集の『薫の出生の事情。柏木と女三の宮の密事』という頭注に尽きるであろう。物語の表層では隠蔽されている秘密、だが、読者のよく知っている事実である」とされ、⁽²⁾ 松田成穂氏が、「事の心」を（略）事の真相、真実の事情、事柄の本質等の意にとっておきたい。とすると、いま源氏が抱いている薫の出生にまつわる真実という意味になろう」と論じられて⁽³⁾いる。

このように、「この事の心知れる」の「事の心」は、薫の出生の事情ということで、それ以上の意味は付されていない。

この直前は、源氏の「静かに思ひて嗟くに堪へたり」の朗詠である。朗詠については、薫ではなく女三の宮に対して、源氏の嘆きを訴えたものであると論じた。⁽⁴⁾ 該当箇所、源氏は女房に意識を向けているが、続いて「二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ」と、女三の宮に意識が戻っている。なぜこの時点で「女の御ためこそいとほしけれ」と、女三の宮を不憫に思う気持ちが生じたのか。その理由が「事の心」に隠されているのではないか。

『源氏物語』において、「事の心」の用例は十六例で、事情・真相という意味で用いられているのは十一例である。⁽⁵⁾ 内訳は、

地の文七例、会話・手紙文三例、心内文は該当用例の一例であり、「事の心知る」となっているのは六例である。⁽⁶⁾

そこで、「事の心」に焦点を絞り、従来から解されてきた意味だけではなく深意もあるのか、地の文に限定して探ってみてみる。⁽⁷⁾

一、「事の心」とは「事の心知る」以外の場合

まず、「事の心」に、「知る」とは異なる動詞が続いている用例を取り上げる。

①かくて後は、中将の君にも、忍びてかかる事の心のたまひ知らせけり。あやしのことどもや、むべなりけり、と思ひ

あはすることどもあるに、
(行幸卷311頁)

これは、源氏が夕霧に玉鬘との関係を明かす場面である。

「事の心」とは、玉鬘が夕霧の姉ではなく、柏木の異母姉であることとされている。源氏は、玉鬘に懸想していることを隠している。

関根賢司氏が、「事の心」を「源氏と玉鬘との関係、その事情、背景」として、「真相を知悉しているのは、当事者と語り手と読者である（略）読者こそが、語り手の意図や情報を超え

て、物語のテキストを織り成していく（場所）^(トコロ)にほかならない」とし、当事者とは、源氏と玉鬘であるとされている。⁽⁸⁾

しかし、夕霧は、野分の巻で源氏と玉鬘が寄り添っているところを見て、「もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり」（野分卷279頁）と、源氏の懸想を既に知っており、「あやしのことどもや、むべなりけり、と思ひあはすることどもある」と、源氏の玉鬘への想いをお見通しである。源氏と夕霧の間で、表層では「事の心」が、玉鬘は柏木の異母姉であることになっている。しかし、二人は、心の中で源氏の玉鬘への懸想を意識しており、それが隠された「事の心」になる。

「のたまひ知らせけり」と、表に現れた「事の心」とは別に、両者の心にその逆の「のたまひ知らせ」ていない、隠蔽された「事の心」、つまり深層の「事の心」が存在する。「のたまひ知らせけり」というのは、源氏が夕霧に対する行為であることから、その目的語である「事の心」の意味が、表層と深層で、述語を介して相対する関係となっている。

深層の「事の心」を解く鍵は、その語句に対応する主語だけでなく、述語も重要なファクターとなるようである。

次は、「事の心」の後に修飾語が入り、「知る」の打消に続く場合である。

②さまで尋ねむものとも劣りの下衆は思はず、事の心をも深う知らざりければ、舍人の人に見あらはされにけんぞ口惜しきや。
(浮舟巻170頁)

「事の心」とは、表層では、手紙が匂宮から浮舟への恋文であるという真相である。「深う知らざりければ」と、下衆は、自分が届ける手紙がそういうものであることをよくは知らないとされている。この前に「時方と召しし大夫の従者の、心も知らぬしてなむやりける」(浮舟巻141頁)とあり、「大夫の従者」とは、この下衆のことである。当初は「心も知らぬ」と、宇治に届ける手紙が浮舟へのものであるとは知らなかった。この時は右近が周りの女房に嘘を言っておまかした。今回、下衆は多少知っていて嘘をつくが、見破られて、「まことは、この守の君の、御文女房に奉りたまふ」(浮舟巻170頁)と、嘘を重ねている。深層の「事の心」とは、匂宮と浮舟が関係をもっていることで、下衆が知らないことである。これは、薫に気づかれてはならないことであるが、その後知られてしまう。

深層の「事の心」は、この時点では薫に知られていないが、

当事者以外にも右近や時方は知っている。「事の心」の後に、「深う」という修飾語が入っていることで、「事の心知らざり」とは異なる点がある。少しは知っているということ、「知る」の完全な打消ではない。深層の「事の心」を知っている者は、当事者以外にも存在する。「事の心知らざり」となる場合にっいては次章で説明する。

以上により、深層の「事の心」には、その語句に対応する主語と述語が深く関わっていると見えよう。

二、「事の心」とは「事の心知る」の否定形の場合

「事の心」に「知る」の打消の動詞が続く三つの用例を見ていきたい。

③上の、夢の中にも、かかることの心⁽⁸⁾を知らせたまはぬを、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて、
(薄雲巻445頁)
「こと⁽⁸⁾の心」は、冷泉帝の実の父が源氏であることを指す。「知らせたまはぬ」の主語は、「上」、冷泉帝である。この後まもなく藤壺が亡くなり、冷泉帝は、夜居の僧都から突然その真相を聞かされて、実の父が源氏であることを知ることになる。

冷泉帝は、「知らせたまはぬ」と、今は知らないとされてゐる「ことの心」が、「知らせたまふ」として、後には知ることになるだろうという逆の状況になることを、語り手が「ことの心」を知らせたまはぬ」という言葉の深層に潜ませているといえよう。後に冷泉帝が真相を知ることについては、誰も知らない。

④わが身さばかりと思ひあがりたまふ際の人こそ、たよりにつけつつ気色ばみ、言出で聞こえたまふもありけれ、えしもうち出でぬ中の思ひに燃えぬべき、若君達などもあるべし。その中に、事の心を知らで、内の大殿の中將などはすきぬべかめり。
(胡蝶巻169頁)

「事の心」とは、玉鬘が柏木の異母姉であることと解されている。関根賢司氏が、それは「事実の一面でしかない。読者は、玉鬘に寄せる源氏の狂おしい『思ひ』の炎をもよく知っているのだ」と述べられている。

以前、源氏が玉鬘を訪問した際に、「いとものきよげに、こかしこいとけざやかなるさましたまへるを、かくて見ざらましかばと思ほすにつけては、えしも見過ぐしたまふまじくや」(初音巻148頁)と、語り手から、源氏が娘として見過ごすこと

などできないのではと評されていた。語り手が源氏の思いを予測しており、本人はこの時点ではまだ明確にそのような意識を持っていない⁽⁹⁾。深層の「事の心」に、語り手だけしか知りえない源氏の玉鬘への懸想が隠されている。右近や紫の上が知ることになるのは後のことで、現時点では語り手以外は、本人も含めて誰も知らない。

深層の「事の心」には、この語句が「知る」の否定形に続く場合は、語り手だけが知っていることが隠されているようである。

⑤いみじく恨みて、事の心を知らねば、あわたたしきまで思ひたるほどに、「山より、僧都の御消息にて、参りたる人なんある」と言ひ入れたり。
(夢浮橋巻385頁)

尼君が僧都からの手紙を受け取り、浮舟に見せたところ、浮舟が動揺し、その様子を見て、尼君は「事の心」である浮舟に関する一切の事情がわからないという場面である。

この前にある「昨夜、大將殿の御使にて、小君や参でたまへりし。事の心うけたまはりしに、あぢきなく、かへりて臆しはべりてなむと姫君に聞こえたまへ」(夢浮橋巻385頁)の「事の心」を受けている。これは、僧都が薫から聞いたことで、浮舟

が大樹の下に意識を失って倒れていた事件の内実のことであるが、尼君はそれが意味することは当然わからない。僧都が知った「事の心」は、真相の一面でしかない。薫、僧都、尼君には、浮舟に関わる事件の本当の真相はわからない。

関根賢司氏が、「尼君は何も知らない。浮舟の真実は、誰も推測しえず理解しえない。僧都も、大将も。ひよつとすると、浮舟自身にも認識しえない運命と魂のゆくえ。語り手も、読者も、作者だって、確かには認識しえない、人間の、存在の、深い闇へと降り立ってしまったのではなかったか」と論じられている^②。

浮舟は薫と匂宮との間で心が揺れ、失踪した後に出家をした。浮舟が、小君から届けられた薫の手紙を読んで、「今日は、なほ、持て参りたまひぬ。所違へにもあらむに、いとかたはらいたるべし」(夢浮橋巻393頁)とし、人違いとして手紙を受け取ることを拒否している。表面に現れた状況はわかっても、その奥にある浮舟の心の奥底に秘された真相は見えてこない。浮舟は、出家をしたことで過去と訣別し、深層にある「事の心」を封印したといえよう。

関根賢司氏が、誰も浮舟の真実を理解できないとされたこと

について、物語の登場人物においてはそうであろう。出家した浮舟が今後どのようなことになるかはわからないが、ここで物語が終結する。語り手は深層の「事の心」の内容を明らかにせず、読者に委ねたと解する。終結部であるため、この点は他の用例と異なる扱いとなろう。

以上により、深層の「事の心」とは、この語句が「知る」の否定形に続く場合は、当事者でさえ知らず、語り手だけが知っていることであるといえよう。

三、「事の心」とは「事の心知る」の場合

該当用例と同様に「事の心」に「知る」が続く二つの用例を取り上げる。

⑥そのをりの事の心をも知り、今も近う仕うまつる人々は、
ほのほの聞こえ出づるもあり。(幻巻523頁)

「事の心」は、紫の上を嫉妬させた当時の源氏の色恋の実情として、権斎院、臘月夜などのこととなっている。「その」は、この用例の前の、源氏が「さしもありはつまじかりけることにつけつつ、中ごろもの恨めしう思したる気色の時々見えたまひしなどを思し出づるに」(幻巻523頁)と、紫の上が源氏の気ま

ぐれな色恋沙汰に嫉妬をしていたことを受けている。後に続く文章が「今も近う仕うまつる人々は、ほのぼの聞こえ出づる」となっていることから、紫の上付きの女房達が源氏の色恋の事情を知っていると記されている。「ありはつまじかりける」であるため、当時紫の上を一時苦惱させた源氏の色恋は、権斎院や隴月夜とのことになる。

関根賢司氏は、「権斎院隴月夜などの事」としているのを適切であるとして、「読者は、だが、たぶん紫の上の知らなかつたであろう藤壺と源氏との密事をも想い起こしながら、源氏とは別の視点に立って、紫の上の生涯を考えこまざるをえない」と論じられている^②。

「事の心をも知り」の主語は、「今も近う仕うまつる人々」であるため、深層の「事の心」には、その者達が知らないこととして、藤壺のことが埋め込まれていると解する。

紫の上が源氏と朝顔の姫君との仲を嫉妬し、源氏が紫の上に弁明した次の場面で、雪の夜に紫の上と五名の女性の評を交わしたことがあった。「深うよしづきたるところの並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど紫のゆゑこよなからずものしたまふれど、すこしわづらはしき気添ひて、かどかどしき

のすすみたまへるや苦しからむ」(朝顔卷49頁)として、源氏が、まず、藤壺が深い教養があつて比類ない女性であり、紫の上が藤壺の姪でそれほど違っていかないが、源氏の女性関係に嫉妬するのが難点であることを話した。続いて権斎院や隴月夜、明石の君、花散里について語った。

「ありはつまじかりける」であるため、明石の君、花散里は対象ではない。源氏が紫の上を嘆かせた過去の女君とのことと、紫の上と五名の女性の評を交わした場面は、「紫の上の嫉妬」を媒介してリンクしてくる。

ゆえに、語り手が、源氏と藤壺との関係を暗示しているといえよう。読者が藤壺のことを想起する前に、語り手が深層の「事の心」に藤壺のことを忍ばせている。

⑦かくて、事の心知る人は少なうて、疎きも親しきも、無下の親さまに思ひきこえたるを、かうやうの気色の漏り出でば、いみじう人笑はれに、うき名にもあるべきかな、父大臣などの尋ね知りたまふにても、まめまめしき御心ばへにもあらざらむものから、ましていとあはつけう、待ち聞き思さんこと、とよろづに安げなう思し乱る。(胡蝶卷49頁)

「事の心」とは、実の親でない源氏の玉鬘への懸想とされて

いる。関根賢司氏が「源氏が玉鬘を自分の娘のように養っている（つまり源氏は実の親ではない）」ということ、その事情、背景、真相」とされている。^⑨しかし、その前に「かくて」とあり、源氏が玉鬘に自分の思いを打ち明けてからは源氏の行動が露わになり、玉鬘が辛い思いをしているというものであるため、「事の心」が示すものは、源氏の玉鬘への懸想と解したい。

深層の「事の心」を解く鍵として、主語と述語が重要であることを既述したので、ここでは「事の心知る人」が、知らないことは何かということを手掛かりとして、深層にある「事の心」を探ってみる。

「親しきも」とあるように、玉鬘付きの女房もほとんどが表層の「事の心」を知らないが、右近は「事の心知る人」である。「他人と見なさむは、いと口惜しかべう思さる。右近もうち笑みつつ見たてまつりて、親と聞こえんには、似げなう若くおはしますめり、さし並びたまへらんはしも、あはひめでたしかし、と思ひあたり」（胡蝶巻179頁）と、源氏の玉鬘への恋情を察して、似合いの夫婦であろうにと思っていることが記されていた。玉鬘が鬚黒と結婚した後、右近が玉鬘に源氏からの手紙を見た場面で、「時々むつかしかりし御気色を、心づきなう思ひ

きこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに思しつづくれど、右近はほの気色見けり。いかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける」（真木柱巻37頁）として、玉鬘は源氏の気持ちを不快に思っていることを隠していた。右近はこのことを気づいていたが、今になっても二人の関係は実際どうであったかはよくわからなかったとされている。玉鬘は当初は源氏を疎ましく思っていたが、恋しく思うように変化し、鬚黒と結婚した後も玉鬘と源氏は互いに惹かれ合っていた。しかし、源氏は自制し、二人は一線を越えることはなく、共に本心を隠し通した。

吉海直人氏は、この箇所について、「というよりも、源氏との関係はこの右近が望み、仕組んだことだったのだ。源氏の心と癖を見通しての計画に抜かりはないはずであったが、源氏もはやかつてのような色好みの主人公ではなかった」と論じられている。^⑩右近は当初は「事の心知る人」として、源氏や玉鬘の気持ちを知って両者の関係をリードする立場にいたにも関わらず、いつの間にか「事の心知らぬ人」となって、二人の関係は予測できなかった。

「事の心」には、後の両者の秘められた関係が密かに組み込

まれているようである。これを知っているのは、当事者と語り手だけである。

以上の点から、「事の心知る」となった場合は、深層の「事の心」とは、表層の「事の心」を知っている者は知らないが、当事者と語り手は知っていることになる。

四、柏木巻の「事の心」とは

該当用例の「事の心」とは、文面上は既述のとおり柏木と女三の宮の密通、不義の子の出生を意味する。源氏は真相を知る女房がいるだろうとしているが、誰かわからない。¹¹⁾この時点で源氏が初めてそういう意識を持っていることについて、先に押しておく。¹²⁾

子が誕生した場面で、「男君と聞きたまふに、かく忍びたることの、あやにくにいちじるき顔つきにて、さし出でたまへらんこそ苦しかるべけれ」（柏木巻298頁）と、生まれた子が柏木に似ていたら困ったことになることと記されていた。源氏は五十日に薫の顔を問近に見て、初めて柏木に似ていることを認識する。以前心配していたことが現実のものとなり、秘密にしていることが露見することに意識が行くはずである。これは、直前の

『「汝が爺に」とも、諫めまほしう思しけむかし』（柏木巻323頁）に、源氏の「柏木に似てはならぬ」という思いが込められていることと符合する。

そこで、自分以外でこの密通の事実を知っている者はいるのかという意識が生じ、その人物は密通に関わった女房である。ゆえに「中にも」と係助詞「も」が付属する。

先に「事の心」には、表面上読み取れる内容以外に、それに対峙するものとして深層に隠されている意味があると論じた。既述の用例は地の文であったが、この部分は源氏の心内文であるので、深層のとらえ方は異なってくる。心の中から現れた表層の意識に対して、心の奥底に潜んでいる意識が深層の意識となる。¹³⁾

そこで、「事の心」における深層の意識を探るために、源氏が表層の「事の心」をどのように捉えているのかを見ていく。真相を知っている者が女房の中にもいるだろうとして、「知らぬこそねたけれ」である。これについては、その女房が誰かわからないのが悔しいと解する。¹⁴⁾

続いて、その女房が「をこなりと見るらん」である。源氏が、薫は自分の子ではないのにそう信じている姿に対してのもので

ある。¹⁵表向き、源氏は真相を知らないことになっているからこそ「をこなりと見るらん」になる。表層の「事の心」とは、柏木と女三の宮の密事ということであるが、源氏はそれを知らないと思われていることが、本人に意識されている。

「事の心」が「知る」と結びついた場合には、深層の「事の心」は、表層の「事の心」を知っている者が知らないことであると述べた。深層の「事の心」とは、密通の真相を知っている女房が知らないことであるので、「源氏が密通の真相を知っている」ということになる。

源氏が表層の意識とは別に、心の奥底で、自分が真相を知っているという意識が潜んでいるということは、表面上は密事を知らないふりをして、自分が知っていることは隠し通すということである。ここに、源氏は女三の宮の密通事件を封印するということが、示されているといえよう。¹⁶

次の「わが御咎」の「わが」ということは、自分以外の者を意識しており、それは女三の宮となる。¹⁷なぜここで女三の宮の「咎」を意識したのか見ていきたい。

表層の「事の心」では、源氏は自分に露見したことを知らない女房を意識している。深層では、源氏が知っていることを意

識しているとなると、深層の「事の心知れる人」としては、女三の宮だけである。女房を意識する一方で、女三の宮も意識することになるので、「わが御咎」に対して女三の宮の「咎」も意識することに繋がっていく。「わが御咎あることはあへなむ」として、女三の宮が自分の不在時に密通されたことについての失策について非難されることを耐えている。密通事件を封印することで、源氏は女三の宮の咎は不問に付すことにしたと解した。

続いて、「二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ」となる。「女の御ため」とは女三の宮のことで、自分よりも女三の宮の方が可哀そうだと思い、愛おしむ気持ちに繋がっている。女三の宮に対して愛おしいという気持ちがあるので、封印した密通事件に関わる責めは自分が引き受けることにしたのである。¹⁸

ゆえに、「など思して、色にも出だしたまはず」として、これからも女三の宮のために「をこなり」と思われる自分を演じ続けるつもりである。¹⁹

「この事の心知れる人」の直前は、源氏の「静かに思ひて嗟くに堪へたり」の朗詠で、既述のとおり女三の宮に対するもの

である。

「この事の心知れる人」から「をこなりと見るらん」という文の前後は、源氏の意識は女三の宮に向けられている。表層では、一旦ここで女房への意識に移って、女三の宮に対する意識が中断し、また戻ってくるように見える。

しかし、「事の心」には、源氏が真相を知っていることが隠され、「事の心知れる人」として、女三の宮を意識し、そこから「わが御咎」、「二つ言はむには、女の御ため」と続いて、女三の宮に対する意識は途切れていない。

おわりに

従来の研究史では、柏木巻における源氏の心内文の「この事の心」は、柏木と女三の宮の密通、不義の子の出生を指すものとして捉えられてきた。本論では「事の心」という言葉に注目し、『源氏物語』の中でそれが用いられる文脈を個々に探った。その結果、「事の心」という言葉が、いずれも単なる「事の真相」を意味するだけでなく、深層を掘り起こしうる語句として、それに続く動詞を媒介として、表層の意味に対峙する隠された意味を有して用いられていることを明らかにした。

『源氏物語』 柏木巻における「事の心」を読み解く

この部分が源氏の心内文であることから、表層と深層の「事の心」は、見せかけた表面上の意識と内に封印した意識となる。「事の心知れる」では、「事の心」に続く動詞が「知る」であることから、深層の「事の心」とは、密事の真相を知っている女房が知らないことで、源氏がその真相を知っていることであると解した。

源氏の胸の内を知っているのは女三の宮だけであることから、深層では「事の心知れる人」として女三の宮を意識した。源氏は、自分の咎だけでなく女三の宮の咎にも思いが及んだが、女三の宮の咎は不問に付すことにし、「二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ」として、封印した密通事件に関わる責めは自分が引き受けることにした。

表面では女房のことを意識しながらも、朗詠前からこの部分まで、女三の宮に対する意識が中断されることなく続いていることを読み取った。

「事の心」という二重的表現を持つ語句により、源氏が女三の宮の密通事件を封印し、意識が二重構造となることが示された。

『源氏物語』 柏木巻における「事の心」を読み解く

一一四

〔注〕

- (1) 日本古典文学大系は、「この事、心知れる人」となっており、三条西実隆筆による青表紙証本を底本としている。一般的に「事の心」とされているので、これに従う。
- (2) 関根賢司氏「事の心 源氏物語の表現」『源氏物語論 言語／表現致』（おうふう）二〇一四年十月
- (3) 松田成穂氏「柏木巻に関する一・二の問題——なんぢがちに——」『平安朝文芸論——源氏物語を中心に』（笠間書院）二〇〇一年六月
- (4) 拙稿「静かに思ひて嗟なげくに堪へたり」——『源氏物語』 柏木巻の白詩引用論再検討——『同志社女子大学大学院 文学研究科紀要』第十七号二〇一七年三月
- (5) 「事の心」の用例のうち、事柄の意味、趣意として用いられるのは四例、事の子細の意味では一例ある（『源氏物語 語彙用例総索引』（勉誠社）一九九四年および『源氏物語大成』を参照）。
- (6) 「事の心知る」は二例、「事（こと）の心を知る」は三例、「事の心をも知る」は一例である。「事の心（も）知る」も「事の心知る」に準ずるものとして扱う。
「事の心知れる」を、「事の／心知れる」とすることは、文意や文法上、可能である。本稿では「事の心／知れる」とし、「心知る」についての考察は別稿に譲りたい。
- (7) 会話・手紙又は、本人が嘘をつく場合もあるので、文面以外

の内容が隠されていることも多い。該当用例は次のとおり、順次、会話文二例、手紙文一例である。

・ かの知りたまふべき人をなむ、思ひまがふることはべりて、不意に尋ねとりてはべるを、そのをりは、さるひがわざとも明かしはべらずありしかば、あながちに事の心を尋ねかへさふこともはべらで、たださるものくさの少なきを、かごとにも何かはと思つたまへゆるして、

（行幸巻300頁）

・ 事の心推しはかり思ひたまふるに、天狗、木霊などやうのもの、あざむき率てたてまつりたりけるにやとなむうけたまはりし。

（夢浮橋巻376頁）

・ 事の心うけたまはりしに、あぢきなく、かへりて臆しはべりてなむと姫君に聞こえたまへ。

（夢浮橋巻385頁）

(8) 「ことの心」となっているが、「事の心」と同じとする。「かかる」が指し示すものが藤壺の心情であることから、「かかること」ではなく、「この心」を一続きの語として扱う。

(9) 源氏に玉鬘への恋情が生じたことが、初めて物語で語られるのは、次のとおり本文の用例④よりも後である。

大臣、おほろけに思し定むべくもあらず、わが御心にも、すくよかに親がりはずまじき御心や添ふらむ、父大臣にもしらせやしてまじしなど、思しよるをりをりもあり。

（胡蝶巻174頁）

(10) 吉海直人氏「右近の活躍」『源氏物語の乳母学——乳母の

いる風景を読む——(世界思想社) 二〇〇八年九月

(11) 密通の仲介をした小侍従については、物語の中では源氏の意識には全く上がっていない。小侍従は乳主とされ、母は女三の宮の乳母で、柏木の乳母と姉妹の関係にあることが記されているので、その存在を知っていれば、真つ先に疑いを持つはずである。源氏は夕霧に対して警戒していたが、柏木にはそうでなかった。さらに、女三の宮の女房達に対してもあまり関心を持っていなかった。紫の上が発病して落ち着くまでは、ほとんど六条院にはいなかった。小侍従の密通仲介を知っているのは、当事者以外は語り手と読者だけで、むしろ源氏は気づいていないとすべきである。源氏が知っているはずというのは、読者の思い込みである。

(12) 源氏に密通の事実が発覚した後、地の文で周囲にいる女房達について次のとおり記されている。

人、はた、知らぬことなれば、かく心ことなる御腹にて、末に出でおはしたる御おぼえいみじかりなんと、思ひ宮み仕うまつる。(柏木巻299頁)

女三の宮が男子を出産した際に、源氏の心内文の後に、「人、はた、知らぬ」となって真相を知らない。五十日の祝いの場面では次のとおりである。

御前の物、色々を尽くしたる籠物、楡破子の心ばへどもを、内にも外にも、本の心を知らぬことなれば、とり散らし、何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりや

『源氏物語』柏木巻における「事の心」を読み解く

と思す。

宮は、さしも思しわかず、人、はた、さらに知らぬことなれば、(柏木巻320頁)

前者は、「本の心を知らぬ」と、薫が柏木の実子であることを知らないとされている。後者も、薫誕生の時と同様に、「人、はた、さらに知らぬ」となっている。

(13) 深層の意識は、深層心理とは異なる。深層心理は、無意識の部分にあるもので、本人は自覚していないものである。

(14) 注釈書では次のとおり、自分の気持ちを分かってもらえないのが悔しい、その女房が誰かわからないのが悔しい、と二通りに分かれている。

・『新編全集』この私の胸のうちを分つてもらえぬのがくやしい。

・『新大系』その侍女が私の真の思いを知らないのは無念だ、の意。その人がだれとも分からねことは悔やまれるよ、の意にも取れる。

・『大系』その媒介をした女房を、誰であるか知らないのが、いかにも悔しく憎らしい。

続く「をこなり」は、次の「わが御咎」と呼応している。「あへなむ」として、自分が非難されることを耐えようとしている。非難する者は、密通の事実を知っている女三の宮付きの女房である。女房は、源氏が紫の上を大事にして女三の宮への愛情はあまりなかったことを不満に思っていた。密通

は、紫の上が発病したことで、源氏が付きっきりの看病をして六条院にはいなかった間に起こった。ゆえに、「わが御咎」とは、女三の宮をほつたらかし、自分の不在時に密通されたことであろう。「わが御咎」について「あへなむ」であれば、「をこなり」と見られることもこらえることになる。自分の胸の内をわかってもらえないことも甘んじることになるので、

その女房が誰かわからないのが悔しいということになる。人の思いは、矛盾することもあるため、この解釈も可能といえそうである。しかし、この場面は、源氏が薫の顔を見ながら似ていることを痛感している。源氏は、密通の事実を知っている者がいるのかどうかということに意識が及んでいるので、「知らぬこそねたけれ」は、自分に向かうものではなく、女房について誰かわからないのが悔しいと解する。

(15) 拙稿「汝が爺に」——『源氏物語』 柏木巻における白詩引用論再考——『同志社女子大学 日本語日本文学』第二十九号二〇一七年六月

(16) 封印するとは、忘れようとするのではなく、言動など目に見える形で表に出さないようにすることである。源氏が密通事件を封印することで、この後の物語の展開にどのような影響を与えることになるのかについては、別稿に譲りたい。

(17) 「御咎」となっているが、「咎」は他人が咎めるため、自分の咎であっても「御」が付属することは問題ない。ただし、保坂本では「御ための咎」となっており、異本が存在する。「御ための咎」であれば女三の宮の咎となる。また大系は三条西実隆筆による青表紙本を底本として「わが、〔女三の〕御咎」となっている。

(18) 古註で次のとおり「源氏は殊勝なり」とされているのは、そのためである（『源氏物語古注集成（桜風社）に拠る」）。

・『細流抄』…ふたついはん 我ためよりは女の御ためくるしと也 源のいひいたし給はぬ殊勝也

・『岷江入楚』…ふたつわかんには 秘 わかためよりは女の御ためくるしと歟 源のいひいたし給はぬ（事）・殊勝也

(19) 源氏は女三の宮の密通を初めて知ったときには「気色に出だすべきことにもあらずなど思し乱るるにつけて」（若菜下巻25頁）と、顔色に出すべきではないと自制しようとした。これは顔色に出るのを何とか抑えており、怒りと理性がぶつかっている。それに対して「色にも出だしたまはず」というのは、それとは異なり感情が抑制された状態で、密通事件を封印したからである。